

研究ノート

司馬遼太郎『街道をゆく』に関連したいくつかの考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 光一 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24960

司馬遼太郎『街道をゆく』に関連したいくつかの考察

高橋光一[#]

Some Pieces of Consideration Provoked by SHIBA Ryotaro's *Going along the Roads*

Koichi TAKAHASHI

Abstract

This is the supplement for the author's previous reports on constructing the database of "Going along the roads" by SHIBA Ryotaro. The issues on Japan and Japanese remaining to be studied are presented by focusing on the four elements of Japanese characteristics: ① admiring the advanced civilization by way of perpetual self-civilization, ② unorganized messy coexistences, ③ emotional spiritualism and avoiding the scientific logic, ④ inclination for the static-order. Special emphases are put on the first two characteristics.

目次

1. はじめに
2. 原初日本列島人の痕跡
3. 先進文明崇拝、永続する文明開化および雑然併存
 - 3.1 先進文明崇拝 — 飛鳥時代から現代まで
 - 3.2 雑然併存
 - 3.3 雑然併存の起源について
4. 日本語
 - 4.1 文字に見る雑然併存
 - 4.2 音声日本語とその退化について
5. 日本人と科学
 - 5.1 ヨーロッパ起源の科学
 - 5.2 日本人と科学
 - 5.3 科学と冒険と好奇心
 - 5.4 科学の中の先進文明崇拝
6. メモ：日本人と美
7. 暫定的まとめ：日本人とは
 - 7.1 先進文明崇拝と文明開化
 - 7.2 雑然併存
 - 7.3 情緒的精神主義
 - 7.4 静的秩序志向
8. おわりに

1. はじめに

司馬遼太郎は、著作『街道をゆく』（以後、『街道』）の趣旨の一つを日本人の探求に設定した。現在、われわれはその成果を全43巻の紀行文として手軽に手にすることができる。その概要は、高橋（2021a, 2021b, 2022）によって紹介されている。しかし、「日本人とは何か」という『街道』の底部に横たわる主題については、各所でそれらしい記述を与えてはいるものの、総括的な答を明示できるまでの時間は司馬には与えられていなかった。その時々の旅にふさわしい個別的な事象に多くの考察を割いたということも理由の一つだったろう。本稿では、『街道』が読者に残したと考えられるこの課題に対する可能な考察を、『街道』に必ずしも捉われずに私見を交えながらまとめ報告する。これは、講師司馬遼太郎が残した宿題に対する学生の答の一つのかたちであり、上記の報告とは異なって資料としての性格はかなり薄いである。

「日本人」（あるいは任意の民族）は、上記の研究ノートで採用した凡例項目でも分かるように、多くの学術分野の専門家が総掛かりで

[#] 東北学院大学〔教養学部情報科学科〕名誉教授、人間情報学研究所客員研究員

取り組むべき主題である。さらに、あるかがわからない“本質”についての問いは漠然として、発するのは容易だが答えるのは難しい。司馬は「3.1陸奥のみち」で、日本人を次のように捉えるところから彼の仕事にとりかかった：

日本人は歴史的にコメに甘え、この農業を中心とした社会と宗教とモラルをつくり、それを水田耕作には不適地の東北にまでおよぼした。…国土経営に冷厳な感覚と能力をもたない民族的性格ができあがったのは、この民族を二千年にわたって養ってきてくれた弥生式水田農法があまりにもすばらしすぎたことによるといえるかもしれない。南部（ここでは、しばしば冷害にあった岩手県を指すが、東北を代表させているとしてよい。：高橋）ではこの甘えに復讐された。いまは工業への甘えに復讐されているというのは、モトはおなじじということの繰り返しであるようにも思える。

“甘え”を鍵として、弥生人の末裔たる日本人を簡潔に捉えようとしている。コメは神聖であり、コメ教はあらゆる困難を乗り越えて、たとえ屍が累々と横たわろうと、国家の安泰のために布教させねばならない。そして、日本と日本人が置かれている環境条件を鳥瞰的に見ることなく、同じ“甘え”とそれによる困難が工業で繰り返されているというのである。

ただし、公平のため、ここで穀物については一つだけ付け加えておく。冷害に強い粟・稗は、耐冷性水稻の開発のあおりを喰って作付けは一時減っていたが、現在は品種改良が地道に進められている（岩手県農業研究センター県北農業

研究所 2009）。研究は地道に進められてきたのである。

話を戻す。上記のような問題設定が適切であると仮定したときに問題となるのは、司馬が考える“甘え”とは何か、“甘える”日本人とは誰のことか、なぜ“甘える”のか、である。

答を内包的に探そうとすると、結果は得てして無内容で無味乾燥なものになる。特に人間に関する現象に関しては、一般的なモデル化は、人間社会に本質的な揺らぎによって、完成したとたんに破綻するのが常である。よって、問うべきは条件付きモデル化－「日本人」が指し示す対象は何かをできるだけ明確にする－がどこまで可能かということである。反骨の精神の重要であることを心に留めつつ¹、ここでは司馬と同じく、主として政治・経済・技術・文化・学術などの社会の制度を作ることに能力を発揮しあるいは多大な努力を惜しまなかった人々、さらにそれらを積極的に支えた日本列島上の人々を“甘え”の主体として仮定する。まず起源から考える。

2. 原初日本列島人の痕跡

日本列島に先史時代から居住した人々としては、おおまかに石器人、縄文人、弥生人と呼ばれる人々がいた。先史時代ないし上代から現代に至る期間に日本列島上に住んでいた人間を一括して想定する場合に、日本列島人という語を用いることにする。

日本列島人の起源についての遺伝学的研究は、司馬の死の時期とほぼ重なるようにして活発化している（例えば、中岡ら2014および引用文献）。それによれば、ある種の遺伝子多型に

¹ 大阪を活動拠点とした司馬がなぜ大塩平八郎にふれなかったのかは謎である。

注目すると、変異の程度は九州・四国からの距離が増すほど大きくなり、沖縄人とアイヌはともに九州・四国人との違いが最も大きい。青森人はアイヌと静岡人の間である。このことから、混合説－まず北・中央アジアからの移入者が縄文人の祖となり、後に朝鮮半島あるいは南方から弥生人が移入し両者の混合が起きた－が示唆されている²。

民族の移動や混合は言語の移動と混合を伴う。混合説が正しければ、その痕跡はいわゆる方言や地名に残されていると考えるのは自然である。沖縄・九州近辺では明らかだが、東北・北海道の地名にそれらしいものが見られるのは周知の事実である（『街道22.2』参照）。子音転換の現象論的な規則がある³ので、遺伝子研究の成果と組み合わせれば転換に要する時間に関する知見が得られる可能性がある。

最近、言語・農業・民族移動に着目した遺伝学、考古学、言語学からの分析を総合した新しい仮説も登場し（Robbeets他, 2021）マスメディアでも取り上げられた。それによれば、9000年前、現中国モンゴル自治区内の西遼河流域に住んだ農耕民が著者達のいうトランスユーラシア語（の一部）の話者で、朝鮮半島に移動した彼らの一部が2900年前に日本列島西部に移住した。弥生人よりも早い時期に半島列島間の移動があり、大陸、半島、列島の言語の共通性がこれで説明できるという。彼らによれば、琉球の先住民は縄文人だった。おおまかには混合

説と矛盾しないようだ。『街道6』で紹介された説とも整合している。（琉球語、本土語、アイヌ語の違いがどう説明されるのかは分らない。）

高橋（2022）で見たように、日本語の現代表記による語頭音の分布パターンは、時代によってあまり変化しない。とりあえず、この頑強さが他の言語にも共通の性質であると仮定する。現代韓国語のW型語頭音分布はV（またはU）型の日本語と明らかに異なることも知った（高橋（2022）。すなわち、ka行、sa行、na行、ma行の分布を見る（残りの音については未調査）とku, su, nu, muの各音が韓国語と日本語で対照的である。言語学的にはまことに単純な比較ではあるが、それ故に無視できないであろう。上記の仮定が正しいとすると、古日本列島人は少なくとも古朝鮮半島人の言語に対して一種の抵抗性を持っていたと推測できる。

混合説によれば、縄文人の祖先となった古日本列島人は北方大陸から移入した。彼らが日本列島に定着した後に朝鮮半島経由で弥生人が移入し縄文人が駆逐されたとしても、縄文人とその直接間接の子孫の痕跡は語頭音分布に残されている可能性がある。彼らの祖語と思われる北方大陸言語－モンゴル語やギリヤーク語（ニブフ語）－あるいはアイヌ語について同様の調査をしてみるのには意味があるだろう。特に、農耕語とは異なる狩猟採集語の対応には興味を持たれる。

これまでの遺伝子調査では、どのような標本が用いられたのか－標本の母集団の属性－はわからない。例えば、調査対象が農耕によって伝統的に内陸に居住してきた人々を主とすれば、農耕民の移動拡散を跡付ける結果を得ることができる。他方、南方で操船技術を発達させ

² 過去千年以上にわたる、個体と個体群の空間移動および遺伝子混合を想像するとこれは驚くべき結果のように思われる。あたかも、個体は遺伝子を置き去りにして空間移動をしているように見えるからである。あるいは、個体集団は想像するほどには実質的な空間移動をしていないものなのだろうか。国家の成立過程では、支配者は被支配民の大量移動を好まないことも考慮すべきであろう。

³ 例えば寺田寅彦全集第6巻（岩波）を参照。

た民族が黒潮に乗って日本列島に移動したという、Robbeets他（2021）によって否定された仮説も可能であろう⁴。列島に到着して以後、水辺の漁労民としての歴史を歩んでいるとすれば、彼らはまた異なった遺伝子集団を形成していて、従来の調査からは漏れてしまっていることも考えられる。なお、『街道』の中では、司馬は、折に触れて海の民である安曇族に注意を向けている。

3. 先進文明崇拜、永続する文明開化および雑然併存

3.1 先進文明崇拜—飛鳥時代から現代まで

司馬は文明を可視的物質的な面から捉えようとする場合が多いように思える、例外はあるが（9.2）。ここで日本の文明について考える。

筆者の手元に『文化の連続と非連続—世界と日本』（石田・上山1967）という半世紀前に出版された冊子がある。『街道』の約5年前で、各学界の著名人が日本文化の特質についての考察を寄稿している。特質の決定要件として、列島が置かれている地理的気象的位置、日本人の好奇心と模倣能力が挙げられていた。興味深いのは、寄稿者の持論の根拠として、欧米人〇〇がこう言ったという一節が挿入される場面が目につくことである。奈良から江戸時代は漢書が権威であったことを思い出させる。このような発言の態度は、学術・政治・経済・報道・教育などの分野を問わず現今でもごく普通に見ることができる。ほんの一例をあげると、ある論者は、日本国内の宗教問題を考える際に、イギリスにおける宗教教育事情に模範事例として言及していた（毎日新聞2022年8月25日）。インドや

タイは対象に無いのである。このようなことを考えると、日本人は、先進文明と彼が見なした社会と文化に無条件に依拠することを議論・意思決定の当然の仕方と心得るようになってきていると見てよいようだ。夜郎自大への良い薬でもあるが、筆者のこの論考でも、このような選択圧が及んでいることは十分に考えられる。

そこで、まず諸分野の**先進文明崇拜**を作業仮説として採用しておきたい。好奇と模倣の対象がこの傾向によって絞られるのである。この視点によれば、百済・随・唐からの仏教導入、明治の欧化政策、昭和後半期に起きた日本社会のアメリカ化—政治、経済、報道、科学、教育の分野で著しい—など、政治主導で起きた国内現象はその内的動因においてほぼ一貫しているといえそうだ。すなわち、先進文明崇拜という内的動因が、白村江の戦いでの自国の敗戦、アヘン戦争での清国の敗戦、黒船来航と薩英戦争・下関事件での敗戦、第2次大戦敗戦とその直後に始まる東西冷戦のような外的危機によって刺激され、政治がその先進文明を受容／利用することで日本社会は変革されると見るのである⁵。その淵源を考える場合には、この特質が縄文人や弥生人の辿った歴史とどう関係しているかが新たに問題となるのであるが、先史時代のことは想像が及ばない。

日本人の模倣の特徴は、それが先進文明の全面的な模倣ではなく、列島上の歴史と文化に応じた改良を伴うということであろう。古代日本の政治制度が文明的なかたちを整えるにあたっては中国とくに唐に負うところが非常に大きい

⁴ 金関他（1964）は、波照間島での発掘物とインドネシア、マレーシア、ポリネシアの発掘物を比較している。

⁵ 1884年の甲申の変=京城事変で朝鮮独立派が敗北したことも対象に入れてもよいかも知れない。当時の時事新報のいわゆる脱亜論がすぐ後に世に出たからである。ただ、明治政府がどの程度この主張に関心を持ったのかはわからない。

が、本家の制度の過度に込み入った部分は国情に合うように大胆に整理をして取り入れていることは歴史家が指摘している通りである。現代の技術工業における模倣と改良の才については、誰もが認めるところであろう。先例がある場合の工夫には注目すべきものがある。為政者は別として、日本人のころがある意味で常に外に向かって開かれていたことを示していると思う。

日本は、地形的には狭小だが地方性が豊かである。先進文明崇拝が日本人の本質の重要な要素であるならば、そしてもち崇拝すべき先進文明が国内にも存在すれば、それによっても日本人の動向が特徴づけられるはずである。実際、先進文明に触れたいという欲求は、地方人の都（みやこ）志向というかたち表れ、それは国司制度によって平安時代に始まったと見てよいだろう。平泉藤原氏や松前藩松前氏も、彼らの気候風土にかかわらず衣食住において都風を好んだようで、都風の生活様式は、支配階級では東北や北海道でも明治期以降も長く見られたのである。

司馬が注意したように、同じ欲求は現代では都風を体感できる東京によって満たされる。資本主義経済制度の波及浸透とともに、農村の重労働と貧困が若い人々を東京へと追いやった時代もあった。

インターネット上のある検索サイトによると、例えば、昭和時代以降に日本人に愛された歌謡曲で、タイトルに「東京」を含むものは「東京ラブソディ（作詞：門田ゆたか／作曲：古賀政男1936）」や「俺ら東京さ行ぐだ（作詞／作曲：吉幾三1984）」など950以上を数えた。ちなみに「大阪」はおおよそ470、「京都」は200程度だった。タイトルには現れないが歌詞に含まれるものも数えれば、「東京」はさらに他を圧倒

するのではないか。昭和の日本人が、場所を問わず夜な夜な「トーキョー、トーキョー」と歌い上げていた様子を想像すると、壮観の感を禁じ得ない⁶。興味ある現象で、詳しい調査に値すると思う。

ただ、平時の単なる煌びやかさで人を引きつけるだけが都（みやこ）ではない。国家の草創期には、都には国家中枢のために働くことができる有能な人材を効率的に集めるという特別の役割が与えられていた。奈良・平安期には僧と建築家がそれに応えた。鎌倉期の信州を含む鎌倉周辺域では、郎党の忠誠心が関西より関東との結びつきを強くした（『街道9.41』）。明治期も同様である。例えば、戊辰戦争で敗れた藩であっても、会津藩から佐川官兵衛（1831-1877警視庁）、山川健次郎（1854-1931物理学）たち、盛岡藩からは那珂通世（1851-1908東洋史学）、原敬（1856-1921首相）、田中館愛橘（1856-1952物理学・外交）、新渡戸稲造（1862-1933外交）といった名だたる人材が東京に集まったことは知っていてよい。これは先進文明崇拝の心理とはかなり異なる動機による。

3.2 雑然併存

日本人の特性として言われるものの中に、あらゆるものが存在可能である、というものがある。キリスト教会の隣にお稲荷さんがあったり、古寺の前に鉄筋コンクリートの商業ビルが建ち、時代の香りを留める個性的な橋の真上を無機質の高速道路で覆ったり、自動車道路と鉄道線路脇に看板と広告塔が乱雑に立ち並んだりという光景を思い出せばよい。上記の『文化の連続と

⁶ このような都志向が日本人特有のものとは断定できない。各国の首都やニューヨークのような準首都を主題にした音楽・小説・映画は数多あるようだ。定量的な比較が必要だろう。

非連続－世界と日本』で、編集者はこれを称して“雑然併存性～nebeneinander⁷⁾”とまとめていたが、司馬は“ゴミ箱をひっくり返したよう”と分かりやすい。雑然併存は、平易かつ重要な概念なので、以下で筆者も使わせてもらう。

明治以前の日本の風景が雑然併存と対極の位置にあったことは、現代の我々も実地に容易に確認できる。次のような感想は多くの人々に共有されるだろう：

奈良井の街並みには、江戸時代の庶民の生活の美がそのままきざみのこされている。それを見ていると、明治維新とともに、それまで蓄積されてきた日本人の美意識の質が、近代化という代償で奪い去られてしまったのではないかとさえ、わたしには思われてくる。

井出孫六⁸⁾『峠－はるかなる語り部』(白水社、1984)

明治以降、雑然併存性が顕著になったというのが正しいとすれば、それは日本列島の過去の支配階級に共通していた“美”意識－“倫理感情”としての平安期の「もののあはれ」鎌倉期の「名こそ惜しけれ」－が希薄になった結果ではないか、と司馬は推測したようだ。

余談を述べる。ドイツ生まれでイギリスに亡命した政治学者・ジャーナリストであるボルケ

ナウ、F. (1900-1957) は、体験的に調査した20世紀のスペイン内乱を彼の著書で報告している。1937年の2度目のスペイン訪問時には情勢はより緊迫していたが、カタロニアで目撃した光景を次のように記した：

爆風を防ぐために街中の飾り窓にはすっかり細長い紙が張られていた。バルセローナ人は地中海人特有の芸術家気質をもっている、そのような場合にも必要を趣味に変えてしまうのである。窓に張られた紙は、店を損なうどころか、ずっと引きたたせるような飾りつけになっていた。

ボルケナウ、F.『スペインの戦場』(鈴木訳、三一書房、1966)

内乱という混乱時にさえ見られる美的感性による生活空間の統一感、長い歴史を経て醸成された民族の特性の表れと言えるものなのだろう。これが民族や国家社会の特性の指標となるという仮定は魅力的である。

日本列島においてある程度共通した“美”的倫理意識が希薄になったとすれば、それはいつからでその理由は何なのだろうか。

江戸時代の日本人が、平時の社会環境の美的不調和に不平を漏らしたという例を筆者は知らない。むしろ、浮世絵「東海道五十三次」や「富嶽三十六景」からは、日本人の生活空間にその美意識を刺激する素材が当たり前で溢れていたことが想像される。このような風景への視線が中国宋代以来の文人画の影響があったか否かはまた別の問題であって、これは専門家に譲るのが相当である⁹⁾。

上に紹介した井出の印象をヒントに明治期

⁷⁾ Schalek, Aliceによる旅行記“Japan, das Land des Nebeneinander : eine Winterreise durch Japan, Korea und die Mandschurei ; mit 193 eigenen Aufnahmen” (Ferdinand Hirt Breslau 1925) に現れた表現と思われるが筆者は未確認である。「雑然」を加えたのは編集者の工夫であろう。

⁸⁾ 1931-2020 小説家。長野県生まれ。中央公論社に勤務後、作家となる。

を眺めると、次の例がある。夏目漱石の小説『三四郎』で、広田先生、与次郎、三四郎の三人が歩きながら会話する場面である。

少し行くと古い寺の隣の杉林を切り倒して、綺麗に地平（じなら）しをした上に、青ペンキ塗りの西洋館を建てている。広田先生は寺とペンキ塗りを等分に見ていた。

「時代錯誤（アナクロニズム）だ。日本の物質界も精神界もこの通りだ。…」

…

先生の説によると、こんなに古い燈台が、まだ残っている傍に、偕行社と云う新式の煉瓦作りが出来た。二つ並べて見ると実に馬鹿げている。けれども誰も気が付かない、平気である。これが日本の社会を代表しているんだと云う。与次郎も三四郎もなるほどと云ったまま…

広田先生の説に与次郎と三四郎も反対していないので、これは漱石自身の感想と見てよいだろう。1908年の作品で、ロシアが旅順・大連を租借しシベリア鉄道の建設に邁進していることに神経を尖らせていた明治政府がロシアを日露戦争で破った、その勝利の余韻が国内に漂っていた頃である。“書生¹⁰⁾”達の富国強兵文明開化政治が視覚的な“雑然併存”の始まりと軌を一にしており、それに伴う文明開化が現在も進

行中であるというのが筆者の仮説である¹¹⁾。

“物質界も精神界もこの通り”で“誰も気付かない、平気である”と漱石の目に映ったのであるが、注目すべきは、実態としての“書生”による政治が150年途切れず続いて現代日本の開化事業を継続させ、同時に視覚的雑然併存を生成し続けているように見えることである。ここで“開化”とは、崇拝する先進文明の部分的導入模倣の意である。

『三四郎』の広田先生は、日本の混乱を視覚的に直ちに確認できるものから精神的なあるいは思想的なものにまで認めている。図1は視覚的な雑然併存の例である。第2次世界大戦後、焼け野原に間に合わせて作られた掘っ立て小屋群が、そのまま新建材の住宅と鉄筋コンクリートのビルに置き換わったような光景である。このような空間に生まれ育ち慣れ親しんだ人間が大域的機能性や統一的調和性という思想を持ちうるのか、持ちうるとしても実現できるのかは興味ある問題である。

3.3 雑然併存の起源について

ここで、近現代の雑然併存は文明開化の所産なのかという問いをたててみる。このような問題意識に近いものはこれまでも多くの人が持ったようだ。例えば、1930年代に和辻哲郎は、都市空間の“錯雑不統一”を日本の伝統的な“家（屋）”と公共観念の欠如を結びつけて理解しようとした（和辻 2013）。同じ頃、寺田寅彦は、東京の“玩具箱や塵芥箱をひっくり返

⁹ 中国文化の専門家内藤湖南（1866-1934）は、江戸浮世絵が中国風文人趣味から離れたものであるところに意義を見出したようだ。礪波（2004）pp.85-104を参照のこと。他方、内藤の批評が個性的に過ぎるという批評も可能だろう。

¹⁰ 高橋（2022）の〈明治維新〉の項を参照。柳田国男の用法からは“社会の文化的背景に関する視野・経験の浅さ”という意も込められているように筆者は感じる。

¹¹ 文化人類学者増田義郎は、“雑然併存”が日本に古来存在したことの例証として、奈良時代にも穴居・堅穴住居・木造住居が同時に存在したであろうことをあげている（石田・上山1967）。対象物の機能の違いをどこに置くかで併存性の認識も異なるだろう。本稿では、異なった社会階級の同時存在による“雑然併存”ではなく主に同一階級内での“雑然併存”を考えている。

したような乱雑さ”に、南北に長い列島の地理的人種の多様性を関連付けて考えていた（寺田

1997）。以下では少しばかり異なった視点から眺めてみる。



図1 現代日本の都市に見られる経済至上主義的**雑然並存**。左：生活圏と商業圏の無秩序な入り混じり。右：生活道路と産業道路の排他的交差。異質のものの併存で新しい機能と不機能が生まれる。

日本列島の地理は、平地が少ない温帯多雨によって作られる複雑な生態環境を維持するのに適していた。人手が及びにくい落葉樹の森林は、夥しい数の河川とともに多種の生物の併存を可能にして多様な生態系を育み、深い森は人知を超えた力を持って人間に豊かな恵みをもたらしてくれた。環境考古学が教えるところによれば、人間界が自然の大変動によって破壊されあるいはその危険に常に曝され続けていても、森に依存した狩猟生活や農耕生活を営む限り、このことに変わりはないのである（安田 1980）。衰退期の四大古代文明域とは対照的である。

複雑な生態系が種の多様性によって維持されるというのは生態学の常識であるが、古神道はその多様性を包む森全体に神性を認め古代人の知恵を表現したのだった。森を維持するのが川である。動植物の生存に必要な水溶性のため大地から失われやすいリン酸とカリウム塩は、河川を遡上するサケによって補充される。サケは、野生動物と人間によって捕食されてその必須栄養素を森に供給する。森と川がつくる生態系の意味を最もよく知っていたのは、たぶ

ん縄文人とアイヌだったろう。弥生人も、古神道によってその思想をかたちにしたと考えられる。明治維新以後に創建された官幣神社である明治神宮が、全国から集められた十数万本の樹木によって成立したことからも、森に代表される自然と伝統的信仰との関わりが明治期においても日本列島では必ずしも失われていなかったことを確認できる¹²。

飛鳥奈良時代以降に仏教が導入され、古神道と争いながら、ともにさまざまな流派に分岐しつつ併存してきた。一方から他方への迫害が起きたこともあったが、ほとんどの時間にわたって、あたかも生態系がその多様性によって守られるかのように、日本列島の人々は八百万（やおよろず）の神々と八百（はっぴゃく）法門の相互共存の中で生活してきたのだった。遥かに歴史が古い巫術も現在まで続いている。加えて人間は、仏教では悟りを得れば仏になり、神道では事績によって神となるので、信仰世界の多

¹² 明治神宮の森は、植物生態学の知見も加味して、長期にわたる樹林相の変遷を視野に入れながら設計された。この意味で、古神道と近代科学の思想が調和的に融合した貴重な事例といえる。

様性はいや増すばかりである。

2000年に迫る歴史の中で、列島面積の狭さにもかかわらず、神道と仏教の両者ともに信仰の中心を深い森の中に置くことを常として豊かな自然環境との共存を維持し、また自らの併存を維持してきたことは注目すべきことである。日本列島人は共存を雑然併存に置き換え、雑然併存こそ安定の原理であると了解しているとする、新技術に基づく近現代の人工的雑然併存は、このような日本列島上の自然人文史的雑然併存の自然な帰結なのかも知れない。であれば、物質的豊かさをもたらす文明開化は、そのような日本列島人の傾向をさらに補強するためのほんの一押しのきっかけを付加するに過ぎないのかも知れない。

残念ながら、このようなこじつけ解釈的説明は実証または補強可能なのか（宗教における多様性を育んだ亜熱帯文明では、雑然並存は必然なのか）、今のところ筆者はわからない。

雑然並存的文明開化がもたらす悲喜劇を肯定的に見ることができなかったのが夏目漱石である。彼は1911年44歳のときの講演で次のように述べている。

「時々には押しされ刻々に押しされて今日に至ったばかりでなく向後何年の間か、または恐らく永久に今日の如く押しされて行かなければ日本が日本として存在出来ないのだから（日本の開化は）外発的というより外に仕方がない」「これを一言でいえば現代日本の開化は皮相上滑りの開化である…涙を吞んで上滑りに滑って行かなければならない」（三好 1998）。

鍵は「外発的」である。漱石は、日本の文明開化の本質を、遠い将来にまでわたる開化の姿とともに見通していた。

ここまで、視覚的雑然併存について考えた。次に、音について述べておく。現代日本のとくに都会がさまざまな機械音－電氣的拡声器による音－で満たされていることは容易に確認できる事実である。大型店内、病院の待合室、バスや電車内、都市鉄道駅のプラットフォーム、繁華商店街、（選挙）宣伝カーが跋扈する屋外など、経済活動と直接結びつく生活空間の多くの場所が、拡声器が拡散する電氣的音声や楽曲もどきで満たされている。同じ階の異なった売り場で異なった声が異なった内容を喋り続けている場合もある。大多数の日本人はこのような聴覚的雑然併存に見事に適応しているらしいことは、中島義道『うるさい日本の私』（洋泉社、1996）に詳述されている。関西の事例が多数挙げられているが、他地域でも容易に確認できる。中島氏は、こうした環境が民衆の性格形成にどのような影響を及ぼすかを考察している。ともあれ、このような音環境は、庶民によって抵抗なく受け入れられているように見えるのである。

日本人論は、日本人のこの特性についても説明できなければならないだろう。地上波のテレビ放送との類似性は考えられる。民放では、ドラマといわずニュース報道といわず、相互に無関係の多数のコマーシャルが、雑多な映像と音響を伴って次々と細切れに挿入されるのである。その教育効果はどの程度のものか、興味ある問題である。ともかく、聴覚的雑然併存も、視覚的雑然並存とともに現代日本の都市における事実なのである。

4. 日本語

4.1 文字に見る雑然併存

司馬が日本人を特徴づける重要因子と考えた日本語を文字について見てみよう。下表に例示した他国の文字表記では字体の単一類型化が認められる（定量的に比較できると面白い）が、日本語では漢字・カタカナ・ひらがなという複数の類型が混在する（翻訳にはGoogleの翻訳システムを利用した）。これにさらにローマ字も加わるのである。

アラビア語	التهاب الرئوي بسبب عدوى فيروسية
タイ語	โรคปอดอักเสบจากการติดเชื้อไวรัส
ロシア語	Пневмония из-за вирусной инфекции
中国語	病毒感染引起的肺炎
朝鮮語	바이러스 감염에 의한 폐렴
日本語	ウイルス感染による肺炎 Uirusu Kanshen ni yoru Haien

参考のため、最下行にヘボン式ローマ字による日本語表記を記した。日本語におけるパターン混在＝雑然？併存は明らかである。ここで“？”を使ったのは、標準日本語は限られた（音節）文字のみを用いるために同音異義語が多く、文字表現の趣意を明瞭にするためには併存はむしろ効果的と言える場合もあるからである。この事情を踏まえた場合は“機能的雑然併存”という語が適切であろう。

文字日本語の最大の特徴は、効率よく識字率を上げる「ひらがな」（昔は女手（めで）とも呼ばれた）と「カタカナ」（昔は漢字の読みを表すのにも用いられた。万葉仮名も同類と見てよい）という表音用の2種類の「かな」があることで、現在は主として前者をやまと言葉ある

いは幼児語用に後者を外来語・擬音語・擬態語用に使い分けている。表音であるから、カタカナを用いれば体験的な咀嚼吸収を必ずしも経ることなく外来語を直ちに日本語として表記し他者に伝達でき、受け取る側も思い思いの理解の仕方でも納得してくれ、したがって“書生”政治による“開化”を効率よく進めるための前提を準備しやすい。具体例としては、『科学技術・イノベーション基本計画』（内閣府 2021）があげられよう。その文章表現を見れば、カタカナによる現代日本の“開化”への取り組み状況を見て取ることができる。そこでは、雑然併存がさらに英語アルファベットを使用するまでに進化している。簡略化された（日本人には無論のこと、日本人以外にも意味不明の）和製外国風の語も容易につくることができる。疑似母語とでもいうべき文字言語で、この点では法事の読経を聞くのに似てなんとなく有り難い。これは政治に留まらず文化・学術一般について言える傾向であり、言語の半透膜で覆われた列島上で伝統的に先進的異国への憧憬を活動源としてきた日本人にとっては都合がよい。

同時に漢字を使用していることが日本語のもう一つの大きな特徴である。日本人は、漢文を日本語風に読み下すための返り点を発明した。これは、ある社会階級の教養と文化を形成する上で大きな貢献をしただろう。また、書道という芸術があることからわかるように、漢字は見て楽しむことができる。『ファール昆虫記』で知られる随筆家奥本大三郎氏は述べている：

シトロンはフランス語でレモンのことである。それに梶井基次郎の小品『檸檬』がある。第一、檸檬という字がいい。そうしてその憧れの根底に、レモンという

果実の色と形の快さがある。

『生牡蠣に庭の檸檬の汁をかけて』
(1986)

ヨーロッパを連想させるカタカナ語を用いながら、漢字の形状が感覚世界の広がりをもたらし、漢字の形状が感覚世界の広がりをもたらしてくれることを簡潔に述べている。しかし以下では、情報の保存と伝達の観点から漢字を考える。

高橋（2022b）の中の〈天蚕糸てぐす〉の項で触れたように、それぞれ意味来歴を有する漢字は、原始的象形文字から始まって、時代を下るとともに、視覚的に情報の圧縮を可能にするいわば古代QR記号となり、日本語の柔軟度が

低いことの原因になりながらも現代まで使用され続けている。

意味を保ちながらの情報圧縮は漢字の得意とするところである。例えば、円周率は、英語では the ratio of the circumference of a circle to its diameter と長いなどはその典型である。

（ドイツ語ではLudorfsche Zahl である。）これが漢字の最も注目すべき特徴で、他の言語のこのような例を筆者は知らない。漢字は世界遺産とする価値がある。逆に言えば、カタカナは語の情報量を空間的に薄める効果がある。これらは英語、カタカナ、中国語を並べた次の例でよくわかる（括弧は現代中国漢字いわゆる簡体。Google翻訳システムによる）：

Computer Network	コンピュータネットワーク	電腦網絡（电脑）
Hacker	ハッカー	黑客（黑客）
Mansion	マンション	公寓
Life work	ライフワーク	生活工作
Social media	ソーシャルメディア	社交媒體（社交媒体）

当然ながら、複合語ほどこの傾向は顕著になる。紙面の広さやページ数など、表記のための物理的空間が限られていれば、外来語のためのカタカナの多用によって、情報量の実質的な減少を余儀なくされる傾向が生まれるだろう¹³。これは定量的な調査に値する問題である。

漢字を使用することは意味を考えるということを手動的に伴う。漢字を忘れつつある現代日本人にとって「かな」ほど使いやすいわけではないが、一時期の、西洋言語学の影響を受けた

国語ローマ字化運動－これも先進文明崇拜のひとつのかたちと見られる－に抗してしぶとく生き残った¹⁴。将来への見通しというよりは、必然性との兼ね合いと情性によるものと筆者は考えている。中立的表現を用いるなら、日本では慣性が大いということである。日本には、古中国のさまざまな文化遺産－漢字、古寺、仏事、元号、暦など－が保たれているという意味でもその慣性の大きさは注目に値する。結果、パ

¹³ こうしたことは文筆家の間では常識であろう。例えば丸谷（1999）を参照。新聞等では、馴染みのないカタカナ語を用いた後にわざわざ括弧付きでひらがな・漢字表現を付け加えることが習慣化されている。これによって実質情報の希釈が加速される。

¹⁴ 当用漢字表など、一種の使用制限による簡略化への努力があるが、杓子定規的運用のために生じる損失は無視すべきではない。例えば、「爬」は当用漢字表には無いため、英語の“reptiles”に相当する語を新聞等では「は虫類」と表記しなければならないといういささか馬鹿げたことが起きたこともあった。せめてカタカナを利用するぐらいの柔軟性は欲しい。

ターン混在のおかげで、情報の意識的圧縮と盲目的複写を行いつつ“開化”を進める環境は整っている。明治鹿鳴館時代（1883-1889）、社交ダンスに明け暮れる高級日本人が造りだされた背景に通じるものがある（ロチ1961）。はるか昔の「ディスカバー・ジャパン」や近頃の「GoToトラベル」も連想させ、文明開化の坂を滑りながらも登ろうとして登りきれない姿が浮かび上がりそこはかとなくもの悲しい¹⁵が、このようなことに意を介する必要を認めないところに日本人の“強み”がある。

“弱み”は、社会が新しい文字と単語を造る力を失って久しいことであろう。このことが、空前の現象を独力で概念的に捉える能力の不足または欠如にもつながっていると思われる。事態の改善のためには、歴史と文化を踏まえた時代に相応しい国語の試みが必要である。現代では、コンピュータによる仮名漢字変換が容易に行えるようになったことも考慮してよいだろう。

最後に、カタカナ語の多用が孕む文化論的問題を指摘しておく。素粒子の属性にスピン—これはヨーロッパ人の着想だった—というものがある。他方、地球の自転やダンスの動きを表すスピンは、欧米では日常言語として定着していた。欧米人は、スピンといえば誰でもそれが何を意味するか直感的にわかるのである。言語を持っていれば心象を概念化でき、逆にいえば、言語で表された概念が心象の網に容易に引っかかりやすいということである。このことから、外来語のためのカタカナ環境に強く依存する分野では、普遍的価値が先進的に創造されにくいことも推測できる。それには、カタカナの使用

（および漢字の万葉仮名的用法）ができなくなったときの状況を想像すればよい。結局、カタカナ語は外来語に全面的に依存するが、他方、外国語習慣の無い一般の日本人は外来語のもととなった言語あるいは心象に基づいて考えたり話したりするわけではないので、原語が表す概念に自ら到達することができにくくなるだろうということである。なお、この推測は、いわゆるフンボルト・サピア・ウォーフ説が語彙や文法のみならず言語機能にまで拡張できるかという問題を提起する。興味深い問題である。

ここでフンボルト・サピア・ウォーフ説とは、母語の言語によって人の環境世界に対する認識や思考が制限されるという考え方をいう。感覚世界については議論があるが、人は特定の語や句—例えば「里山」や「無限」—が意味を成すための諸前提をその言語系の裏付けを通して無意識のうちに想起することを思えば、直感的に納得できる説である。例としては、「証明」という概念（用語ではなく）が定着しなかった中世までの中国では、自然認識の広さと深さに瞠目すべきものがあつたにもかかわらず、近代型の数学と自然科学が生まれなかったことがある。これに対し、日本では江戸期に和算の言語が普及していて、一部の武士と庶民は「証明」することの意味を体験的に理解していた。直感の大部分は、言語および思考と活動の場を共通にしているのだろう。明治期の科学分野における文明開化の背景として考慮すべき事実である。あわせて、上述の壁は多言語使用の環境下では低くなるかという問題も生まれる。

4.2 音声日本語とその退化について

古代、日本は「言霊（ことだま）の幸わう国」だった。音声の遠隔作用に際立ってみられ

¹⁵ これに比べれば、若者の造語能力は地についていて力強い。一時の「激おこぶんぶん丸」などは傑作。

る、言葉が持つ不思議な力を認め幸いをもたらす力を信じたのである。司馬は次のように書いている：

りんごは、日本語として響きがうつくしい。賞でて発音すると、赤くて果実のはちきれそうなりんごが、まるまると目の前に生まれてきそうな感じがする。

(41 北のまほろば)

生きた言語は、発音されてその隠された力を発揮する。音声日本語の本質は何か、は重要な問いであろう。

高橋 (2021a, 2021b, 2022) は、日本語の音分布を現代の五十音に基づいて語頭音に限って調べてみた。分布型には時代による顕著な変化が見られない、韓国語のW型に対し日本語はU-V型であるということが推定された。音分布に関する最も単純な調査であり、この方面の専門家にとっては既知のことであるかも知れないが、このような結果は筆者には興味深いものだった。朝鮮半島と日本列島における言語文化的連続を想起させる (例えば曹2014を参照されたい)。

“音声日本語には長期にわたり退化圧がかかっている”と筆者は想像するが、これはどの程度マトを当てて (あるいは外して) いるのだろうか。明治以前に何が起きていたのかは、日本語との親近性がある (古) 朝鮮語との比較である程度解明される可能性がある。直近の出来事では、明治期に日本語の実情に合わせて日本人 (物理学者田中館愛橘ら) が考案したいわゆる日本式ローマ字があり、それは以下のようなものである：

アa	イi	ウu	エe	オo
カka	キki	クku	ケke	コko
キャkya	キュkyu	キョkyo		
サsa	シsi	スsu	セse	ソso
シャsya	シュsyu	ショsyo		
タta	チti	ツtu	テte	トto
チャtya	チュtyu	チョtyo		
ナna	ニni	ヌnu	ネne	ノno
ニヤnya	ニユnyu	ニョnyo		
ハha	ヒhi	フhu	ヘhe	ホho
ヒヤhya	ヒユhyu	ヒョhyo		
マma	ミmi	ムmu	メme	モmo
ミヤmya	ミユmyu	ミョmyo		
ヤya		ユyu		ヨyo
ラra	リri	ルru	レre	ロro
リャrya	リュryu	リョryo		
ワwa	ヰwi	ウu	ヱwe	ヲwo
ガga	ギgi	グgu	ゲge	ゴgo
ギャgya	ギユgyu	ギョgyo	グワgwa	
ザza	ジzi	ズzu	ゼze	ゾzo
ジャzya	ジュzyu	ジョzyo		
ダda	ヂdi	ヅdu	デde	ドdo
ヂャdya	ヂュdyu	ヂョdyo		
バba	ビbi	ブbu	ベbe	ボbo
ビャbya	ビュbyu	ビョbyo		
パpa	ピpi	プpu	ペpe	ポpo
ピャpya	ピュpyu	ピョpyo		

この表では、文字表記が現在の義務教育では失われた幾つかの音とうまく対応していることが分かる。

ついでに触れておくと、平安時代以降の標準母音は「あいいうえお」の五つであるが、奈良時代まではこれに加えてさらに3音 (学術的に「ī, ē, ō」と表記される) があったことが

万葉仮名の使用傾向の研究から知られている。例えば、大野（1993）を参照されたい。江戸時代では「わぬ干ゑを」の音は「あいうえお」の音と明確に区別されていたらしい。さらに「ゑ」「を」には2通り以上の音があったことが海保青陵（1755-1817）の『山王談』に記されている。青陵は江戸生まれだが諸国を遍歴しているので、これは江戸地域に限った話ではない可能性もある。

明治以前の日本語の音分布を表すときは、日本式ローマ字のほうが実情をより適切に捉えられそうだ。日本占領軍総司令部の指導で1945年以降に採用されたヘボン式は、日本式を単純化し外国人に学習しやすいものとなったが、これが社会に普及定着することで音声日本語のさらなる退化が進行したと思われる¹⁶。

司馬は、漢字については呉音、漢音、唐音の混在があることを指摘している（16.9叡山の諸道）。行=コウ・カウ（漢音）、ギョウ・ギヤウ（呉音）、アン（唐音）はその例である。時代の先端を走った昔の仏教界の影響らしい。この混合使用は生活実用上は殆ど無駄であるが、歴史を背負った言語が醸し出す時代背景の情感をいまに伝えてくれる。ここでは“雑然併存”の一例として指摘するに留め詳述しない。

5. 日本人と科学

司馬は常に人間を忘れない。情念が歴史をつくることをよく知っているのである。司馬が「権力の観賞（3.1）」へと誘われたのもその故であったろう。これは（自然）科学とは全く逆の視点であって、そのためか『街道』における（自然）科学への関心は低いのが敢えて言えば筆者にとっての不満である。

¹⁶ コンピュータのキーボードによるローマ字入力では多様性が復活しているように見えるのは面白い。

作品中に、科学に関する警句的表現が現れる。彼によれば、浄土真宗は自然科学と同質（21）であり¹⁷、（仏教の）空もまた科学でとらえうる相対的なもの（41）で、科学は後進国の秀才にとって便利（39）であり、子供の精神が芸術と科学を生み大人の精神が儒教を生む（40）のである。なんとなく尤もで、司馬が科学をどう捉えていたかもぼんやりと浮かび上がって面白く、さらに掘り下げる価値もありそうだ。

しかしながら、大人の読者向けの書き物にしては科学を軽く扱い過ぎている。歴史を現代社会の鏡として用いるなら、また日本人を冷静に考える上でも、科学ないしは科学的な思考・判断の問題を避けることはできない。このことを明らかにするために、この点に関し『街道』を補足するための論考の素材を提示する。科学とは、観察・実験と仮説・理論から構成される思想であるが、以下でこの語を、近代ヨーロッパ科学のみならず、再現可能な経験に基づく“論理的”思考の意味にも用いることにする¹⁸。後で、さらに簡潔な表現を与える。

5.1 ヨーロッパ起源の科学

アルキメデス（287?BC-212?BC）は古代ギリシャ圏の最も優れた数学者・科学者・技術者で、シラクザ王ヒエロン2世のもとで、アルキメデスの原理の発見など歴史に残る研究成果を挙げた。ポエニ戦争でローマと戦っていたシラクザが陥落する直前に、ローマ軍の将軍はシ

¹⁷ 仏教は本来人間と事実をあるがままに見ることを勧めて死後の世界に頼ることが少なかった。この、自然哲学に通じる精神の名残があったということだろう。中村元『ブッダのことば』（岩波）を参照。

¹⁸ “論理的”の語意はあいまいである。昔、日照りの時の雨乞いの効果は、その後の降雨によって確認されたい。論理性の内容は、その時代の経験の精度に依存するのである。

ラクーザ側にいた科学者アルキメデスを鄭重に遇するよう兵士に命じていたという。科学技術に対する畏敬の念の表れであろう。

ローマ帝国が崩壊し、ギリシャ科学が長きにわたってイスラム社会の土台となったが、ヨーロッパとアジアにはその光は届かない時代が続いた。

十字軍運動とレコンキスタののち百数十年を経て、近代自然科学が産声をあげ世のブームとなりつつあった時代、ヨーロッパでは、社会的にあるいは政治的に高い地位にある人々にとって科学一般は教養の重要な要素となった。彼らはまた、科学が社会や国家の発展のための基礎となることをも認識していた。イギリスでは、世界最古の学会である王立学会¹⁹が1660年に設立された。フランス科学アカデミーは1666年に設立され、後にルイ14世によって1699年に再出発した。オランダの王立芸術科学アカデミーはボナパルト, L. (1778-1846) が1808年に設立した研究所の後継である。ドイツは後進国だったが、カイザー・ウィルヘルム学術振興協会－後のマックス・プランク研究所－が1911年に皇帝の“強い熱意”によって設立された(メンデルスゾーン 1973)²⁰。政治家の間に科学熱が広まったこともあってか、この時代のヨーロッパの政治的支配者達は科学の意味と重要性を共通に認識していたことが想像できる。プラトンのアカ

デメイアが思想的背景であろう。

産業界からは、ソルベー, E.²¹の寄与が非常に大きい。物理学の変革期にソルベー会議(第1回は1911年)を企画実現し、その後の基礎物理学の発展において計り知れない成果をもたらした。スウェーデンの化学者ノーベル, A. (1833-1896) がスウェーデン王立科学アカデミーに科学者顕彰のための基金を寄付したことはよく知られている。のちに帝国主義や覇権主義と呼ばれるようになった一群の国家運動の始まりと期を一にしていることには注意しておくべきであろう。

5.2 日本人と科学

背景となる哲学をもたず、科学をほぼ百パーセントの移植から始めた日本には、5.1で述べた事例に対応する歴史上の持続的経験は殆ど無い。徳川家康が三浦按針から幾何学の話聞いたことはあったというが、そのような学問が市井の文化活動から立ち上がり国家事業へと結実することはなかった。選ばれた学者による藩主への進講がなされることがあったとしても、それは趣味の域を出ない別種のものである。

徳川政権の第8代将軍吉宗(1684-1751)は例外であろう。いわゆる享保の改革で文武を奨励し、自らも数学・天文学に強い関心を示したといわれている。和算の研究者を庇護し、鎖国政策下の日本における解析学－無限を扱う数学の一分野で、円周率 π の決定をはじめとする円の研究を目標の一つとし、日本では円理と呼ばれた－を世界の最高水準にまで高め発展させることに貢献した(小倉1940, 伊達2002)。和算の発展については、関孝和(1642-1708)や建部賢弘(たけべかたひろ1664-1739)のような天才の存在に加え、中国書『算法統宗』をもとに

¹⁹ Royal society. 王室と無関係ではないが、民間団体なので「王認協会」などと訳されることもある。

²⁰ 同書によれば、皇帝ウィルヘルム II (1859-1941) は考古学に熱心だった。また、同書で詳述される物理化学者ネルンスト, Nernst, W. H. (1864-1941) は「皇帝に追従せず、よく率直に格式抜きで話しかけ、頻繁に王宮での食事に招待されていた」。

²¹ Solvay, E. (1838-1922) はベルギーの化学者で、炭酸ナトリウムの製造のためのソルベー法を発見して工業界に革命をもたらした。ソルベー会議は、ソルベーが選んだ物理学者達による小規模学会である。

書かれたという『塵劫記』の出版によって、数学という普遍論理を愛好する文化が全国の下級武士階級や町人社会に浸透していたことが背景にあったことも重要である。奈良平安期に貴族官僚のものだった算術は、江戸期に至って庶民のものになっていたものであり、その普及は、明治期の自然科学における急速な文明開化を成功させた要因の一つだったと思われる。和算は、明治期に漸次西洋数学に置き換えられていった。

しかし、江戸期には、発展した和算に代表される基礎科学が国家の基盤になるという認識は無く、そのゆえか、明治以降の政治の指導者が、科学者と場を共にして茶話を楽しむあるいは基礎科学を財政的に支援するという伝統・習慣は、一般には無かったのである²²。むしろ、明治以降は、科学一般への無理解がしばしば事実と論理の軽視という姿であられ、それが20世紀以後現代までのこの国の伝統となっているかのようになさえることがある²³。古い話であるが、1938年に、いわゆる“水ガソリン事件”が起きている（渡辺 1972）。

²² 渋川春海（1639-1715）による暦の改訂では、会津藩主保科正之や水戸藩主水戸光圀の支援があり、その成功が幕府天文方の常設につながった。人間の健康と生命に直接関わる医学では、佐賀藩主鍋島直正（1814-1871）がオランダ医モーニケに種痘法の伝授を要請したことがある。為政者は実学的学問に対しては関心を持つことがあった。これに対し、ある種の美術ははるかに恵まれた環境にあった。

²³ ここまでの話で、「科学」を「芸術」に「科学者」を「芸術家」に置き換えて考えることも意味があるだろう。Hoffer, E. (1951) が指摘するように、創造性が発揮できる限り、経済上の問題は通常欲求不満の原因とはならない点でも両者は似たもの同士である。政治的指導者が科学者や芸術家と情報交換を楽しむ姿は一つの夢であるが、それが荒唐無稽とは思えないのは、情報ないしは印象の普遍的伝達可能性が科学と芸術の特性であることによる。と同時に、政治への距離において芸術と科学が入れ替わり科学が社会の制度になった現代では、異分野との交流の努力を惜しまないことが科学者の責任となる。現状を、中国思想史の中で自然に最も近づいたが政治を避けた（ニーダム）道家の態度と比べることができる。

帝国軍部が石油枯渇の不安に怯えていたある日、海軍航空司令部に、水からガソリンを作ることができるという男が現れた。燃料部長は、 H_2O はCを含まない、これは詐欺であるから取り合わないようと上官に進言したが、「Oから部分を取ればCになる」ということで実験をすることになった。3日間にわたる一連の“実験”が30人の立ち会いの下で行われた。最終日に男はガソリンが入った瓶を提示した。しかし、立ち会い者は事前の実験で使用される器具の詳細を調べていたので、その瓶が外から持ち込まれたことを直ぐに見破った。男は警察に引き渡された。

この歴史挿話は、過去の日本で社会や組織の指導者に、基礎科学的な知識と論理を尊重しないという傾向があったことを示す一例である。

上に挙げた話は、昭和のある時代の特殊性に由来するというわけでもなさそうである。789年、征東軍が蝦夷と戦って破れたときの記録が続日本紀にある。それによれば、将軍紀古佐美は、兵員・必要糧食・地理的状况・戦況を具体的に報告して撤退を最高指揮権者である桓武天皇に進言したが、桓武は前計画と矛盾し“理”に合わないとしてこれを非難している。ただし、このような古史料における記述の信頼性が必ずしも保証できないことは、北原（2006）らによって論じられている。

1940年、数学者小倉金之助（1885-1962）は、科学の精神と数学の文化を欠く国民から真に力のある国が生まれることは期待できないと警告

を発した（小倉1940）。小倉は、数学者の立場から‘科学’の語を数学と自然科学を念頭において用いたと思われるが、これは実は人文社会自然の科学一般に対して考えられるべきことである。

戦時における小倉の悲痛な声が現代の政治指導者達に届いていないことは、2020年、ときの日本政府が日本学術会議を財政支援しない方針を示したことで明らかになった²⁴。自然科学についていえば、基礎研究の継続が基礎技術および新技術開発力を維持することにつながるのであるが、日本ではCOVID-19禍に即応するためのワクチンやITソフトウェアの開発もできなかったという実情を国民が知ったことも記憶に新しい。科学技術研究力を測る指標の一つと考えられている論文の引用数でも、2018年までの10年で6位前後から9位へと低下しているという（文部科学省 2020。ちなみに上位は中国とアメリカ）。今後の注視検証を要するにしても、こと行動に関する限り、基礎科学研究に手を抜かないアメリカ、ロシア、イギリス、中国、台湾との差は歴然となったのである。他方、日本と科学・技術・文化で角逐しようという他国にとっては、日本政府の学術に対する上記の‘姿勢’方針の発表は良い知らせだったかもしれない。

科学すなわち事実と論理を理解できないという現代指導者の弱点は、そのまま日本社会の弱点でもある。新型コロナウィルスが国内で蔓延した2021年は、延期された東京オリンピックが開催された年だった。この年、大会開催を前にして、新型コロナウイルス感染症対策分科会

が示した危機管理の見解に対し、責任大臣が「我々はスポーツの持つ力を信じてやってきた。別の地平から見てきた言葉をそのまま言っても、なかなか通じづらい」と発言したが、これは本稿で指摘してきた過去の日本社会の特性が現在になお生きていることを端的に表す事例となった。高橋（2021b）は「統治の要諦は人心の安定にあり、宗教が国（家）と相即不離の関係にあった時代が地域を問わず長く続いたことを思い出させる。司馬の関心は、現代の日本政治における信仰を考える際の出発点となる」と述べた。天平期に続いた災厄を祓うための大仏建立が、1300年を経てCOVID-19禍中のオリンピック・パラリンピック開催に置き換わり、日本における政治意識は依然としてマツリゴトの様相を呈している。

5.3 科学と冒険と好奇心

道の消えるところから真の冒険が始まる。果実を必ずしも約束できず、時には危険さえも伴う基礎科学は、技術開発と同様にこの冒険の精神に支えられる。

人は成功譚に引き付けられる。アインシュタインは、20世紀の物理学のパラダイム転換に本質的な寄与をした人として不滅の名声を得ているが、彼が晩年に精魂を込めた統一理論の探求は失敗したという一言で片付けられ、これについて語られることは殆ど無い。しかし、信念に基づいた彼の不屈の探求精神は多くの敬意が払われるに値する。それは、地球が丸いと信じて東洋に至る道を探すために大海に乗り出したコロンブスの勇氣に比べられる。もしもアメリカ大陸が存在しなかったら、コロンブスはヨーロッパに空しく帰還するか、乗組員の反乱にあって生き永らえていなかったかもしれない

²⁴ 2022年8月に撤回された。しかし、科学界ないしは学術界の閉鎖性が間接的に指摘された点に関しては、意味のある事件だった。

が、次の航海者には有益なヒントを与えることになったはずである。同様に、失敗したアインシュタインの冒険は、次世代の研究者たちに、どこに道を探すべきかについての貴重なヒントを与えてくれた。最初の一步を踏み出した者の勇気があって科学は本質的な進歩を達成することができるものなのである。その科学の裾野は人知を超えて広い。

日本人と冒険については以下のような話がある。愛媛県生まれの二宮忠八（1866-1936）は実用飛行機を研究した最初の日本人である。1891年にプロペラ模型飛行機の飛行に成功し²⁵、2年後から本格的研究が始まった。資金調達のために軍での研究を申し入れたがそれは拒否された。実用に向けての具体的成果が無かったためらしい。ライト兄弟が動力飛行に成功したのは1903年だった。

日本に文明をもたらした中国、スペイン、ポルトガル、オランダ、および彼らを引き継いだアメリカ、イギリスは冒険の民を生んだ。他方、江戸期徳川幕府の新規御法度に象徴される“小心”は冒険を忌避した（高橋2021b〈徳川家康〉の項を参照）。これが国民性となって現代に受け継がれているように見える。

興味深いことに、明治以降、日本人は個人では特に数学と自然科学の分野で国際的に重要な寄与をし続けてきた。このことは、科学一般が本質において好奇心駆動型の活動であり、平民日本人の活動の源泉に伝統的に平賀源内（1728-1779）や前野良沢（1723-1803）・杉田玄白（1733-1817）流の好奇心があったことを思うと逆説ではない。本草学の小野蘭山（1729-1810）や民俗学の菅江真澄（1754-1829）あるいは鈴木牧

之（1770-1842）のような優れた教養人が現れたことも記憶されるべきである。司馬の言を借りれば、これら強烈な好奇心の近世における元祖は織田信長（『街道』3.213）ということになるだろうが、言い換えればそれは安土桃山のエネルギーであり、200年の時の流れを経て再び地表に顔を出した好奇心の地下水脈でもある。徳川の新規御法度にも関わらず、日本社会には伝統的に“変わり者”の存在を許す土壌があったのである²⁶。

日本人が近代の西洋科学を知って150年が経過した。その間の、日本人研究者が成し遂げた自然科学への寄与には目を見張るものがあり、兄弟の技術とともに国家の制度を構成する重要な骨組みになった。その基盤は平民の尽きない好奇心にあり、現代においてもそれは変わらない²⁷。

5.4 科学の中の先進文明崇拝

他方では、先進文明崇拝と明治以来の果実主義から生まれる懸念がある。例を挙げよう。中国料理・韓国＝朝鮮料理・日本料理では、味を「甘味・酸味・辛味・苦味・塩味」の五つに分類するという伝統がある。飲食時に口腔内に生じる感覚を味と呼んでいたのである。これに対し、一部の学者やマスメディアによって辛味は味ではないという主張がなされることがある。

²⁶ 司馬は、蒲生君平、林子平、高山彦九郎を例に、江戸時代に“奇人”が社会的に認められた存在だったことに触れている（3.17）。明治以降では、南方熊楠（1867-1941）が筆頭に挙げられる。

²⁷ 一例として、国内に広がっている市民活動のサイエンスカフェを挙げることができる。サイエンスカフェ・ポータル（<http://cafesci-portal.seesaa.net/>）を参照。イギリスの市民組織The Royal Society（<https://royalsociety.org/>）も参照されたい。なお、日本人の好奇心の及ぶ範囲の広さは人文科学においても瞠目される。これは、諸大学に在籍する、あるいは在野の研究者の多様性から知ることができる。

²⁵ 湯浅光朝編『コンサイス科学年表』（三省堂、1988）。

“味”は解剖学的には舌の感覚器官である味蕾で生じるが、辛味に対応する味蕾が無いというのがその根拠である。還元主義的西洋科学の観点に立ったこの主張は“味”を定義しなおすという前提の下では必ずしも誤りではないが、生活に深く根を下ろした文化伝統による“味”の意味を無視したものである。美味しい果実の収穫のみによって評価され制度に取り入れられた先進文明を崇拝しそれに甘える者が陥りがちな、歴史や文化に対する無関心から生じる無邪気な傲慢であろう。文化に無断で文化を再定義する権利は、科学には無いのである²⁸。

科学とは、普遍言語を構築する事業である。それは、国語、文化、宗教などによらず、適当な訓練によって検証可能な“事実”に関する推論と意思疎通、情報交換のシステム構築を目指すのである²⁹。縄張り意識、功名心や自尊心に駆られ生存競争に曝される科学者間で正常な意思疎通が阻害されることもあるが、普通は一過的とみなされる。普遍を画一と取り違えて文化の揺らぎが見えなくなるのは、科学が移植された国の国民の性としては無理の無いことなのだろうか。

二つ目の例を挙げる。白井裕子氏は、日本とヨーロッパの林業をつぶさに調査した建築家である。政治と結んだ科学技術が伝統文化を衰退させるさまを見た白井氏は、建築にまつわる日本の現状の一端を紹介して次のように述べた（白井 2009）：

²⁸ 問い：“迷信”は文化か。

²⁹ 数学と自然科学において最も著しい。スポーツと芸術にも似た特質がある。

³⁰ 同省の『公共建築木造工事標準仕様書』（令和4年版）によると、軸組構法（軸構造系）：軸組構法（壁構造系）以外の軸組構法を総称したものとある。ここでいう「壁構造系」がツーバイフォーに相当するらしい。

国土交通省は毎年、『建築統計年表』³⁰を出している。そこに伝統構法を含む日本に昔からある「在来工法」について、こう説明してある。「プレハブ工法、枠組壁工法以外の工法をいう」。枠組壁工法は米国から入ってきたツーバイフォーである。外から入ってきたカタカナ工法に対して、日本に昔からあった木造建築構法が「それ以外」と説明されているのである。

先進文明を崇拝し経済効率を追及し続けた末に、自らを語る言葉さえ失っていく様が見えてくる。氏はまた次のように述懐している：

科学は…むしろ技術や文化を発展させるためのものだろう。数値で根拠が得られないものを排除するのは、科学の間違った使い方だ。…科学は研ぎ澄まされた生き物としての感性や、偶然や必然を生む長い歴史の積み重なり、あらがうことはできないだろう。

科学も建築も制度であることを思えば、ここでラスキン（1880）を引用するのは当を得ているだろう：

政治に関して真実である事柄は、芸術の分野では政治的な一面を持っていると言われている「建築」に関しても、同様に真実であると思われる。

排他的雑然併存とつながることもありそうだ。

過度の先進文明崇拝は自身の判断力を育てない。冒険嫌いや先例主義とあいまって、海外で

の評価を経てからでないと、日本人は日本人自身の独創を見出せないということは科学の世界でもしばしば起きることである。

自然科学あるいは科学一般は、司馬の稠密な知識の網目からは漏れてしまったらしい。ニーダムが名著『中国の科学と文明2』（思索社1974）で明らかにしたように、中国における“科学的”知識の集積には驚くべきものがある。（“”で括ったのは、ニーダムは“科学”の定義を与えていないからである。）長岡半太郎が物理学を始めるにあたって中国文献を調べ、東洋人にも西洋科学をものすることができるという自信を得たという逸話にも司馬は言及している。『仙台・石巻』で長岡半太郎を、あるいは中国紀行でニーダムを取り上げたときが、科学への思索を深める絶好の機会だったが、それは残念ながら十分に生かされたとはいえない³¹。芸術、経済あるいは歴史の分野からさえも、分野に応じた物足りなさの声が聞こえてきそうである。しかし、このことは『街道』の疵ではないのであって、諸々が読者への課題として残されているのである。

6. メモ：日本人と美

筆者の専門ではない“美”については3.2で僅かに言及しただけで、雑然並存に重点を置いてこれを正面から扱うことはできなかったが、さすがに平衡を欠く感がある。日本人の美意識は『街道』で時折取り上げられた。また、これ

までも多数の専門家による優れた考察があり、また、脳科学の進展と平行して、専門家によって生理学的かつ美学的に考察されるべきことであり、筆者が論じる余地は殆どない³²。しかし、司馬をして『街道』を歩ませた要因としての権力構造と美意識との関連については気になることがあるのでメモ的に書き留めておく。

生活倫理やそこから派生する（正）義や名誉と美を結びつけることは、どの社会でも普通に見られたであろう。それは生き方の規範を規定し、したがって同時に死のありかたにも影響を及ぼす。とくに日本では伝統的に正義・美・死が不即不離の結びつきをもって意識されてきた。身の潔白を死によって証明するという考え方の源もここにあると思われる。また、吉田兼好は、不名誉を望まない貴族社会に一族の絶えることを望んだ人々がいたという話を紹介している（『徒然草』³³第六段）。起源はわからないが、「滅びの美学」という用語が現代の巷間にも流布している。“学”を付すことで一種の高尚感を漂わせようとする意図が感じ取れる。

武士道を初めとする“道”の影響は最も大きいであろう。平氏一族の滅亡の哀切を極めた物語や、武士の潔さを桜に象徴させる国学的思想の歴史は、明治になって新渡戸稲造の『武士道』－そこには切腹についての詳しい説明がある－に結晶して日本に逆輸入され、儒教精神を一つの柱とした1882年の「軍人勅諭」とともに、明治以降、政治・軍事・文化における指導的日本人の倫理的な美意識形成に与ったように思わ

³¹ 中国は、天平から明治に至る過去の日本人（とたぶん朝鮮人）にとっての精神的支えだった。その中国になぜ近代科学が生まれなかったかという昔からの問題がある。ニーダムはその理由を封建的官僚制に帰している。しかし、中国で近代数学が生まれなかった一方で日本では和算が発展したことは、これだけでは説明できない。

³² 例えば、ラマチャンドラン（2005）は脳科学の立場から“美”の起源を考えている。

³³ 鎌倉末期に書かれた吉田兼好による随筆で、貴族男子の読み物だったらしいが、戦乱期を通じ歌人・知識人に愛読され、江戸期には町人の知恵のよりどころとなった（『世界百科事典』平凡社、1990）。

れる。王政復古以後の日本で、王朝文化に美の規範を求めようとする態度が一部に生まれたのも、その源はここにあるのではないか。

筆者は先に、「アジア太平洋戦争³⁴で、日本の戦争指導者が生命の保存の原則に全面的に反する作戦を立案・実行したのはなぜか」という問題を提起した（高橋 2022）。その可能な答の一部として、上述のような、貴族と武士の倫理が融合して形成された、権力者の美の潜在意識をあげておきたい。（もちろんこれだけではあり得ない。特に、官僚化した軍部が統帥権を恣意的に運用したことの害があったことは歴史書が指摘している。）極端に図式化して病理学的に述べるならば、この美意識が特殊な精神主義に変質し、悪性腫瘍さながらに肥大し自己免疫不全症を引き起こして自らを攻撃する病に犯されたのが1930年代以降の日本社会だった。

観念的倫理美に対置されるのは可視的実用美であろう。ややもすると退嬰的になりがちな美の‘上部構造’に対し、生活実用に徹した‘下部構造’の美が柳宗悦によって発見され、そのことが新たな芸術運動の展開に繋がり、結果として美の平衡感覚を保つことができたのは日本人にとって幸運であった。『街道』（14, 18, 27, 29, 41）を参照されたい。

7. 暫定的まとめ：日本人とは

筆者の研究ノートは「明治維新の前後で、あるいはアジア太平洋戦争敗戦の前後で、日本列島上にいた日本人は同じ日本人だったのか」という問いの提示で始まった（高橋2021a）。西欧文明を受容してわずか40年で日露戦争に“勝

利”した東洋の小国日本を見た諸国民に降り掛かった謎でもあったが、特に、アジア太平洋戦争前後に生まれ戦後教育を受けた日本人にとって、この問いは深刻な謎である。深刻であるがゆえに、日本人が意識的無意識的に目を逸らしてきた問題でもあった。もちろん、国民性や民族性には、変わるものと変わらないものがあるだろう。ここで問うのは、その変わらぬ部分があるか、あるとすれば何かである。いま、その答に接近するための幾ばくかの材料が得られたと思う。

前兆は遙か以前からあったのであるが、この数年間で、筆者の記憶に残るできごとが続げまに起こった。前節でも触れた2021年の東京オリンピック・パラリンピックが、問題を整理するなかで浮かび上がった日本社会の特質を再確認する材料を提供してくれたのである。それらを思い出しながら、また、司馬遼太郎という先人の希有な仕事を参照しながら、日本の権力機構－権威をもって大衆の動向に拘束条件を課しそれを左右する力を持つ社会的存在のことで、とくに政治・経済・報道・教育の機構を念頭に置いている－の中樞が期待してきた、かつ現在も生きていると認められる日本人像を4項目に整理する。以下で「日本人」は特に断らない限りこの意味で使用する。

上記の意味での日本人は、江戸期はおおむね武士と商人階級に属し、明治期は高等教育を受けた人々である。小泉八雲（1850-1904, Hearn, Lafcadio）は次のように述べている（小泉1977）：

近代化された上流階級からは何事も学びとることはできない。人種間の相違がも

³⁴ 一般に“大東亜戦争”または“太平洋戦争”と呼ばれる。前者で“大東亜”は今は社会的に認知されておらず、後者ではアジア大陸での戦争は含まれないので、ここでは両者とも採用しない。

つ深い意味は、高等教育の結果にますますはつきりといわば日常の事として示されている。…明治の新教育の下で、日本人の性格はなにか奇妙に硬いものの中へ結晶してしまうようである。…完全に近代化された最上層の日本人と西洋人思想家との間には、互いに知的に感応するといった交流関係はまったく存しない。

1904年に死去した八雲は、夏目漱石とエリセーフとの1908年以後の交流を知る由もなかったのであるが、八雲の表現は極端化されたものではあっても真実の一面を捉えていたように思われる。八雲が抱いた印象は、既に見てきた日本の文明開化現象と整合しているからである。

歴史に登場し、かつ八雲とともに本稿で注目する日本人群は、日本人全体の1パーセントにも満たない。通りを歩く「普通の田中さん」も視野に入れた先駆的日本人研究としてよく知られているものに、ベネディクトの『菊と刀 The chrysanthemum and the sword』(1947)がある。この書は、近現代科学の訓練を受けた外国人によって外からの目で書かれた。以下で、現在に通じるであろう日本人の特性を抽出するにあたり、この文献も適宜引用する。これまで集中的には取り上げなかった**情緒的精神主義と静的秩序志向**については、ここで考察する。

7.1 先進文明崇拝と文明開化

2000年来一貫した日本人の特質である。国内では権威を崇拝国に求めるという態度を生み、対外的にはご都合主義的態度³⁵を支える。一般庶民には、ことわざ「長い物には巻かれろ」や「よらば大樹の陰」によって容易に理解され

る。鎖国時代の文化・芸術活動を除けば、ほぼ分野によらず、海外とくに先進文明社会からの評価を強く意識する習慣も同根であろう³⁶。ここから、輸入と模倣によって文明開化状態を維持するエネルギーが供給される。明治期であれば、“ナイフやフォークを使うこと”(夏目漱石)がこれに相当する。2020年開催予定だった東京オリンピック・パラリンピックの準備作業が、デザインの国際的模倣問題(いわゆる東京オリンピックロゴ問題)で始まったことは象徴的だった³⁷。他方、模倣と借用から独自の普遍的価値が産みだされうるものであることは、芸術と科学および技術が証明していて、現代的文明開化のかたちを現出している。これらを通した社会変革が、(制度に組み込まれない領域での文化活動は別として)先進文明からの外圧であるという事情は変わっていないようだ。

7.2 雑然併存

雑然併存は、自然環境と精神世界の変わらぬ特質であり続けた。近現代では、好奇心と先進文明崇拝によって引き起こされる文明開化状態の日本的表現ともなった。俗にいう「東京は世界の文化の吹き溜まり」は、そうした日本の雑

³⁵ ベネディクト(Benedict, 1947)は“situational realism”と表現した。これはopportunismやwait-and-see policy = 「日和見主義」とは異なるように見える。直訳すれば「場当たりの現実主義」か。本文では、原理原則が見えない外圧対応法としての「ご都合主義」をその訳語にあてたが、ベネディクトの意図に添っているかはわからない。儒教主義を貫いた過去の中国・朝鮮と対比させるとよいのかもしれない。

³⁶ 2001年の文部科学省科学技術基本政策では「ノーベル賞に代表される国際的科学賞の受賞者を欧州主要国並に輩出すること(50年間にノーベル賞受賞者30人程度)」(傍点筆者)と謳っていた。他方、日本には日本国際賞、京都賞という高水準の国際的報賞制度がある。

³⁷ デザインの模倣はこれに始まったわけではない。例えば守(1994)参照。ただし、人間の存在形態に大きな変化が無い限り、模倣と独創の問題はデザインには常につきまとう。

然併存性をうまく捉えている。多方面の好奇心の所産である文化的多様性が実現維持され、芸術と科学および産業の領域で優れた成果を生む伝統的基盤となっている。縄文人・弥生人の末裔たる日本列島人の強みであろう。

独特の環境利用から生まれる現代の土地景観については、場当たりの野放図な雑然併存の例に事欠かず、ある面－大局的構想力－での弱点を表している。いわば盆栽社会である。盆栽には、川端康成が彼のノーベル賞講演（川端 1968）で述べたように、枯山水や茶道と似て一瞬の動きに世界との調和を感じ取る禅に通じるものがあるが、広く全体を見る余裕を失っているのが現在の姿のようだ。多様な自然環境の中で、狭い領域を堀で囲いそこだけに注意を向ける社会が長く続いたことも影響しているかもしれない。司馬の見たところ、根源に日本特有の土地問題があるのだが、それだけではなさそうだ。事実、言語にも雑然併存性が認められる。近現代日本語の雑然併存性が社会現象としての雑然併存性とどのように関連するかは今後の研究課題として残されている。

7.3 情緒的精神主義

精神が肉体と行動を支配するという観念は武士社会の形成とともに強まり、精神の優位性を強調したアジア太平洋戦争中に極限に達した。禅に代表される仏教にくわえ儒教・神道、あるいは武士道に代表される「道」の影響が大きい。国民を統御する安撫な手法だったが、結果として、科学的論理を理解できず、前例のない課題について対外的な情報発信ができない日本人をつくり、その伝統は現在まで続いている。『科学技術基本政策』（文部科学省 2021以前）に代表される科学振興政策は、科学技術立国という

呪文とは裏腹に、つい最近まで政治の中樞が科学の本質を理解していなかったことを見事に反映している。既に触れた、COVID-19蔓延下でのオリンピック担当政治家の発言も、一部為政者の科学論理の忌避またはそれに基づく思考力の欠落を実証した。また、教育界の一部で、念じることで水の物性を制御できるという奇妙な話が広がったことがある（天羽ほか 2011, 高橋 2012）。国語の作文指導が、伝統的に心情の発露を重視してきたという指摘もある（木下 1981）。長年、そのような教育慣習の中で育ち生活している教育界の人々が、高等学校の国語で小説文と論説文を切り分けて論理的思考の教育を行うという文部科学省の方針に不安を感じるのは当然であろう。

7.4 静的秩序志向

社会組織が安定し官僚化したときの一般的傾向である。日本においては、アジア太平洋戦争までの階級社会あるいは官僚的機構の中で著しい。『菊と刀』の中で、ベネディクトはこれを指摘するのに「各々其ノ所ヲ得=taking one's proper station」という、1945年以前の日本の外交用語を引用した。外交用語ではあったが、身の程を知って生きることの大切さを教え込まれた大衆一般の感覚を代表したもののように思われ³⁸、かつこの傾向は現在まで日本人に受け継がれているように見える。多くの領域で世襲が好まれる。また、公認の職務を果たすことに専念し領分を越えた発言はせず社会を騒がせないことが人の美德とされる。庶民は「長いものには巻かれろ」「出る杭は打たれる」「この道ひとすじ」や、文部科学相が「身の丈にあ

³⁸ 例えば『徒然草』第百三十一段に「おのが分を知りて、及ばざる時は速やかに止むを智というべし」とある。

わせて」大学受験に臨むことを期待した発言（2020年）、東京オリンピック・パラリンピック大会組織委会長の「女性は弁えている」発言（2021年）で状況を納得できるだろう。（後にいずれも撤回）

同じ理由で、海洋冒険家堀江謙一氏（1938 -）による太平洋単独横断という1962年の業績は、日本社会のしきたりに背くこと著しく、当時の日本人には評価不可能だった。同氏が2022年に逆コースの単独航海を成功させたときは世間は彼を暖かく迎え、日本の一般社会は冒険を許容する方向へと変わりつつあることを印象付けた。この変化が内発的か外発的かは検討の余地がある。

過去の一般の—すなわち権力行使の対象となる—日本人の特性については、既にベネディクトが分析した。現代社会まで考慮すれば新たに枚挙すべき多くの事柄があるだろう（例えば、政治談話忌避と政治選挙における低投票率、発達した衛生観念、涙好き、など。また、一般の日本人はいま色々な局面でこれまでにはなかった特質を現し始めてもいるらしい）。ここでは、権力構造に着目した以上の4点だけを可能性として指摘しておく。司馬の言う“甘え”の根源も、このなかに認めることができよう。

＊

これらに、このノートの主題ではないが、アジア太平洋戦争後に日本人の精神的支えとなった経済（カネ）万能主義を加えておきたい。これが、上記の4つの傾向が現象するときの具体的なかたちを決める一つの要素となっているように見えるからである。このことが端的に窺えるのは、政府の補助金・助成金制度である。人間をホモ・エコノミクスと捉え、人間の創発性

さえカネによって自在に引き出せるという妄想に近い期待とは裏腹に、細部にわたる複雑な規則によって現場の創造的活動が逆に損なわれているという現実がある³⁹。他方では、規則の細部に通じている人間が尊重され敬意を払われる。こうして、日本人は、その時々文明開化のありかたや静的秩序のかたちを官民一体となって描き出しているのである。

8. おわりに

日本と日本人に関する初等的な考証と試論、司馬遼太郎の『街道』に触発され、かつ意識を「司馬遼太郎」という特殊性に収斂させる「司馬学事始」となることをできるだけ避けつつ、研究ノートとして提示した。司馬の問題意識の中に普遍性を探す試みといってよい。ただ、司馬の関心の所在に依拠する結果として、この考察が政治現象に代表される権力現象に向けられがちになるという偏りをもたらしたことは意識しておく必要がある。このことも含め、この試論は、筆者の知識の限界によって暫定的とならざるを得ない。

現代人は、人間中心主義と科学技術とがもたらした全人類規模の災厄に境界を越えて立ち向かわなければならない時代に生きている。人間中心主義は、地球上の資源⁴⁰を回復不可能に至るまで消耗し尽くすことを合理化し、最新の

³⁹ 事例はいくつでも挙げられる。“指導要領”によって疲弊する教育界や、報告書作りに追われる大学関係者ならおおかたは体感しているだろう。白井（2009）は、制度・規則が誰のためにあるのかを考えさせられる素材を林業の中に見出した。ただし、COVID-19禍を受けた、経済産業省主体の持続化給付金制度（2021年1月施行）のような実効性を重視した例もあることを指摘しておく。

⁴⁰ “資源”は、ふつう人間が興す産業にとって有用なものと定義される。ここでは、娯楽を含む人間の活動全般にとって有用とされるものを考えている。例えば、趣味としての狩猟は野生動物を資源とする。

科学技術で武装された資本主義、商業主義および民族主義はそのための最速の手段を提供してきた。全人類的となりつつある人間のこのような営為は‘本当は’何のためなのかという問いがここでも頭をもたげる。そのようなときに、日本や日本人という特殊な主題に関わり続ける意味があるのかという内なる声が聞こえてくる。であるにしても、“汝自身を知れ”は国家や民族についてもあてはまると『街道』は教えてくれていると結論づけることは許されるだろう。

ここで、未来に向けた重要な問題が生まれることに注意したい。明治維新以前に形成され存続した日本列島上の歴史的文化的雑然併存性は、司馬が『街道』の随所で着目した経済－とくに商業－主義的雑然併存とは別種のもので、人間と自然の分離対立がもたらす諸困難からの脱出を模索する西欧型文明社会⁴¹への一つの暗示となり得たはずのものだった。時代が要求した明治以来の過激な欧米化によってその機会は失われたが、それにもかかわらず、この日本特有の－日本の開化の始まりが朝鮮半島と中国大陆からの文明の移入によるものであったことを踏まえれば東洋的とも言うべきかも知れないが、それでも列島の地理的特殊性は本質的であったろう－歴史的文化的雑然併存は、いま絶滅した訳でもなく氣息奄々という状態でもない。問題とは、日本列島人がこのことを意識して独自の価値を創造しその情報を全地球的に発信できるのかということである。これに関しては、東西両文明の融合という観点からの考察が、既に100年前に内藤湖南によって提示されていることを思い出しておこう（礪波2004）。

アジア太平洋戦争の敗戦によって一時は否定

された日本独自の精神文化に再び多方面から光をあててもよいだろう。一例を挙げれば、明治以降の日本人が過去から受け継ぎ新たに開拓した領域に武道がある。目に見える格技として理解される柔道、合気道および空手道は、個人により創造的に開拓され個人の業績を超えて世界で受容された。さらに、文化圏によらず人間が「道」を求めうるものであることは、格技ではない弓道と欧州人との関わりからもうかがい知れる（ヘリゲル 1982）。

司馬が認めた物質文明だけが文明ではない。日本列島の先人と現代人は、非物質文明の領域で普遍的価値を創造し続けていることは認めなければならない。同時に、過去の日本の精神主義が今後どのように変容するかも見届ける必要がある。

先進文明崇拝に偏りがちな日本人の傾向がどの程度牢固としたものなのかも知れるところである。欧米型先進文明を支える柱の一つが自然科学で、それゆえに日本の科学者社会は、主に欧米の動向や欧米からの評価にその関心を向けがちであった。他方、世界の総人口の7割を占める発展途上の国々では、政治・経済・文化等の理由で科学の楽しみと恩恵を十分に享受できない環境を抱えつつも、自然科学への渴望を絶やさない若い学徒が育ち、富める社会からのさまざまな支援を待っているという現実がある⁴²。彼らとの接触・交流は、科学という普遍言語を豊かに構築する共同作業のためのよい機会となる。日本の科学者社会がこの地球的現状と主体的に取り組むときがあるとすれば、それが、科学を通して日本が先進文明崇拝と異なる道を歩む契機となるだろう。

⁴¹ 例えば、リビングストン（1992）参照。

⁴² 例えば、Anwar, M. S. (2022) 参照。

以上でこの小報告を終える。門外漢の無謀にも見える試みではあったが、すべての日本人はそれぞれにおいて日本人であることを専らにしているという事実でその釈明に充てたい。自身を正視するのは誰にとっても難しい。粗忽ゆえの誤りもあると思う。各方面からのご教示を頂ければ幸いである。

古来「日本人」を主題とした多くの考察がある。なかでも、本稿で部分的に引用したベネディクトの『菊と刀』はこの分野の近代的古典である。この書と『街道』は、主題に共通のものを持ちながら究極の目的と方法は対照的であり、この二つを比較検討することも面白いだろう。今後の課題である。

謝辞

この小論の苗床を用意して頂いた東北学院大学教養学部、および有益なご教示を頂いた元経済学部高橋秀悦先生に深く感謝申し上げる。

参考文献

- 天羽優子・菊池誠・田崎晴明 2011『「水からの伝言」をめぐって』日本物理学会誌 No.5, 342
- 石田英一郎・上山春平（編）1967『文化の連続と非連続－世界と日本』energy 4 no.4（エッソスタンダード）
- 岩手県農業研究センター県北農業研究所 2009『岩手県における雑穀品種選定試験の歩みと品種育成』（雑穀 no.2）, 4
- 大野晋1993『新版日本語の世界』（朝日選書 484）
- 金関丈夫・国分直一・多和田真淳・永井昌文 1964『琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査』水産大学校研究業績第426号

- 川端康成 1968『美しい日本の私』（ノーベル財団、角川ソフィア文庫 2015 所収）
- 北原糸子（編）2006『日本災害史』（吉川弘文館）
- 木下是雄1981『理科系の作文技術』（中央公論新社）
- 小泉八雲 1977『小泉八雲作品集 2 巻』（森・平川訳、河出書房新社）
- 小倉金之助1940『日本の数学』（岩波新書）
- 白井裕子 2009『森林の崩壊 国土をめぐる負の連鎖』（新潮新書）
- ダイヤモンド, J. 2012『銃・病原菌・鉄』（草思社）
- 高橋光一 2012『シリーズ・東北学院大学の教育を考える 第3回』教育研究所報告集（東北学院大学）No.12 59-84
- 高橋光一 2021a『『街道をゆく』データベース作成と同書にみる司馬遼太郎の視点1：「あ」～「こ」』東北学院大学教養学部論集 186, 133-151, 訂正：同187, 185
https://www.tohoku-gakuin.ac.jp/research/journal/bk2021/pdf/liberalarts186_04.pdf [retrieved July 2022]
- 高橋光一 2021b『『街道をゆく』データベース作成と同書にみる司馬遼太郎の視点2：「さ」～「の」』東北学院大学教養学部論集 187, 149-185, 訂正：同188, 0
https://www.tohoku-gakuin.ac.jp/research/journal/bk2021/pdf/liberalarts187_07.pdf [retrieved July 2022]
- 高橋光一 2022『『街道をゆく』データベース作成と同書にみる司馬遼太郎の視点3：「は」～「わ」』東北学院大学教養学部論集188, 175-204, 訂正：同189, i

- https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=24873 [retrieved July 2022]
- 伊達宗行 2002 『「数」の日本史』(日本経済新聞社)
- 寺田寅彦 1997 『寺田寅彦全集 3』(岩波)
- 曹喜眞 2014 『朝鮮の古時調と日本の古典和歌の対比研究の試みー自然素材に着目してー』国際日本文学研究集会会議録 37、1-28
- ニーダム、J. 1974 『中国の科学と文明 2』(思索社) p. 196
- Needham, Joseph 2004 "Science and civilization in China" (Cambridge Univ. Press, London)
- ベネディクト、R. 1961 『菊と刀』(長谷川訳、世界教養全集 7、平凡社) * 訳に欠落部分がある。
- Benedict, Ruth 1947 "The chrysanthemum and the sword" (Secker & Warburg, London) .
- ヘリゲル、E 1982 『日本の弓術』(柴田訳、岩波文庫)。
- Hoffer, E. 1972 "The true believer" (Harper & Row Publishers Inc.)
- 丸谷オー 1999 『思考のレッスン』(文藝春秋) pp. 261-262
- 三好行雄(編) 1998 『漱石文明論集』(岩波文庫)
- メンデルスゾーン、K. 1973 『ネルンストの時代』(藤井・藤井訳、岩波)
- Mendelssohn, Kurt. A. G. "The world of Walther Nernst - The rise and fall of German science" (The Macmillan Press Ltd., London)
- 守誠 1994 『特許の文明史』(新潮選書)
- 安田喜憲 1980 『環境考古学事始ー日本列島 2 万年』(NHKブックス)
- ラスキン、J. 1880 『建築の七燈』(杉田訳、鹿島出版会、1997)
- ラマチャンドラン、V. S. 2005 『脳の中の幽霊ふたたび』(山下訳、角川書店)
- リビングストン、J. A. 1992 『破壊の伝統』(日高・羽田訳、講談社学術文庫)
- Livingston, John A. 1973 "One cosmic instant - Man's fleeting supremacy" (Houghton Mifflin Company, Boston)
- ロチ、P. 1961 『秋の日本』(村上・吉永訳、世界教養全集 7、平凡社)
- Loti, P. 2018 "Japoneries d'Automne" (Wentworth Press)
- 渡辺伊三郎 1972 『日本海軍燃料史』(燃料懇話会編、原書房)
- 和辻哲郎 2013 『風土』(岩波文庫)
- Anwar, M. S. 2022 "Breaking the spell of scientific isolation in the developing world", Physics Today 75, 10-11
- Robbeets, M. et al. 2021 "Triangulation supports agricultural spread of the transeurasian languages", Nature 599, 616-621

資料

- 加藤周一(編) 1988 『世界大百科事典』(平凡社)
- 崔海淑(編) 1997 『日韓・韓日小辞典』(ハンリム)
- 司馬遼太郎 1986-1996 『この国のかたち 第1 - 6 巻』(文藝春秋)
- 東北史学会(編) 1965 『解説 日本史資料集』(中京出版)
- 礪波護(となみまもる)(編) 2004 『内藤湖南 東洋文化史』(中央公論新社)

直木孝次郎他（訳注）1992『続日本紀4』（平凡社）

中田祝夫（編）1963『新選 古語辞典』（小学館）

林大（編）1986『国語大辞典 言泉』（小学館）

文部科学省 2020『科学技術指標2020』

<https://www.mext.go.jp/kaigisiryo/content/000070956.pdf> [retrieved August 2022]

文部科学省 2021以前『科学技術基本政策』

https://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/kihon/honbun/003.htm [retrieved July 2022]

内閣府 2021『科学技術・イノベーション基本計画』

<https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/6honbun.pdf> [retrieved July 2022]

要旨

司馬遼太郎『街道を行く』の主題「日本人とはなにか」についての考察を、4つの特質 1. 先進文明崇拜と文明開化、2. 雑然併存性、3. 情緒的精神主義、4. 静的秩序志向、に着目して提示する。